

# 書き方のススメ

福江 純

〈大阪教育大学天文学研究室 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1〉

e-mail: fukue@cc.osaka-kyoiku.ac.jp



マンガの神様の手塚治虫は膨大な量の作品を残した。SF作家のアイザック・アシモフやアーサー・C・クラークも大量のSF小説や解説書を書いている。かくあるごとく、上には上がいるわけだが、ずうずうしさを承知のうえで、モノを書くための秘訣？を少しだけ書いてみたい。

## 1. ハウトゥライト

教育実習の協力校回りやら出張やらで目の回るような1週間が終わり、久しぶりに気持ちのいい天気になった2008年6月13日(金)。講義も午前中に終わって少しほけっとしていたら、“How to write?”というタイトルのメールが飛び込んできた。あれあれ、またスパムか英文添削の案内かと思って、さくっと削除しかけたら、送信者欄が“WADA Keiichi”(!)。危ないアプナイ。

読んでみると、「どうやったらそんなにたくさん教科書・本・記事が書けるのですか?!」ということで、コツでもあれば(あるいは企業秘密!?)、読み物として月報に投稿して欲しい旨が書いてある。……あれえ、本稿を一度り書いて、いまメールを読み返してみたら、はっきりとした依頼でもないかなあ。単なる感想だったのかももしれないけど、まあいいや、書いちゃったし。

実は、たいしたコツも秘訣もなく、ましてや企業秘密などなくて、単にチリが積もっただけの感もある。それでも、いくつか守ってきたルールや考え方などもあるので、役に立つかどうかかわからないが、少し書かせてもらうことにした。こういうことを書いてもそろそろイヤミにはならない年頃だろう。

## 2. リテラシー

まずバックグラウンドとなるリテラシー(読み書きそろばん能力)から書いてみよう。これは一言で“多読”に尽きると思う。

ぼく自身、こどものときのマンガから始めて、大量に読んできて、いまでも大量に読む。大学への往復で、小説なら日に1冊、ライトノベルなら2冊ぐらいいは読んでいる。種別は多種多様で、SF小説が多いものの、通常の小説、科学書、歴史書、伝記、雑学書、ときに言葉の本や書き方の本、あるいはゲーム雑誌まで、乱読の極みである。

大量に読めば、書き方教室とかでトレーニングしなくても、自然に言葉や書き方の勉強になっているし、ネタなども手に入ってくるものだ。感動した文章や役に立った文章が1行でもあれば、その本を読んだ(買った)価値はあると思っている。

具体例を挙げると、ぼくは割と砕けた(ときに壊れた)文体で書くことが多いが、これは十数年前ぐらいからで、新井素子口語文体の影響を強く受けている。また文章の書き方については、本多勝一『日本語の作文技術』がイチオシだ。文章の書き方の本は何冊も読んでいたし、ぼく自身もすでに何冊か本を書いた後だったが、『日本語の作文技術』を読んだときは、ウロコがばらばらと落ちていったものである。この本は、自宅用と大学

用と学生用と合計3冊も買った。お守りみたいなものである。あるいは最近の科学書だと、アンドルー・H・ノール『生命最初の30億年』、カール・セーガン『百億の星と千億の生命』、ポール・デイヴィス『幸運な宇宙』あたりが、いつかこんな本を書いてみたいと思うぐらいの出色の出来だった。司馬遼太郎『竜馬がゆく』は、真のプロフェッショナルはこういう文章を書くのだ、と思い知らされたものである。

もちろん、素晴らしい文章を読んだからといって、そんな文章が書けるわけではない。しかし美味しい料理を食べ歩かないと舌が肥えないのと同じで、優れた文章を読まないと目は肥えない。

さらに、“読む”と同時に、“書く”も重要だ。それも、たくさん書く、とにかく書く、何でも書く。

別に最初から、本や記事である必要はない。ゼミの資料、夏の学校の資料、研究会の集録、科研費の報告書、ホームページ、ブログ、何でもいい。習うより慣れろというように、料理が上手になるには何回も料理するのが基本なのと同じだ。

ぼくが院生時代に書いた初記事は『天文月報』での解説記事「アクリション・ディスク・ストーリーズ」(1983年、76巻、92頁)だったが、そのときは3カ月くらいかかったと思う(おまけに手書きの時代だった)。知識も経験もレベル1桁ぐらいしかなかったためだが、慣れだけで1/3に圧縮できるだろう。

なお、一つ注意しておくといいいのは、書いたモノは書きっぱなしではなく、きちんと整理して保存しておくことだ。自分の財産として、財産目録を作っておくと、再利用できることがある。

### 3. スタンス

次に、執筆の基本スタンスとしては、原則的に依頼があったら断らない、とにかく書く(笑)。畑違いのものでも、時間がなくても、原稿料が出な

くても、その記事なり本なりが少しでもサイエンスの教育や普及などに役立ちそうな限り、基本、引き受ける。もちろん、物理的に不可能だったり、数学の教科書などは、さすがに断った。

畑違いのものを……というのは、少し説明がいるだろう。昔、たくさん本を書いている人に、ぼく自身も秘訣を問うたことがあって、「知っていることなら、すぐ書けるヨ」という返事をもらった。たしかにそれは一理ある。実際、最初のころは、知っていること“しか”書けなかった。ただ、知っていることを書くだけで、すぐにネタが枯渇する。だから、慣れてくれば、畑違いのものを勉強しながら書くのも必要だろうということだ。

ぼく自身も、初めて天文・宇宙以外の分野まで踏み込んだ本(『やさしいアンドロイドの作り方』)を書いたときは、当時、茶の間にあった仕事機の脇に十数冊の本を積み上げた。いや、いまでも、執筆中の本で最新の宇宙論まで触れるために、宇宙論の本を読んだり、エキピロティック(大火)宇宙論の原著論文を読んだり、あまつさえ、宇宙論のワークショップに出てみたりする(実はちょうどこの部分も、6月14日に、新装相成った京都大学基礎物理学研究所湯川記念館で行われた宇宙論のワークショップ中に書いている)。

畑違いのものに手を出す大きなメリットとしては、自分の分野のことだけしていたら、決して読まないような論文を読んだり、絶対に出ないような研究会にも出かけられるという楽しさがある。いまはノートパソコンがあるので、どこでも書ける。今日は少し風邪気味で微熱があるが、なかなか快適な会場である(♪)。でも講演の内容はほとんどわからない(悲)。その代わりに、秘書さんが選ぶという話を聞いたことがあるが、基研の研究会で出るお茶菓子のセンスは抜群である(嬉)。

ともあれ、未経験の内容や新しい形式など、新機軸にチャレンジしていけば、書くこと自体にも飽きがこない。人間、飽きたら仕舞いである。

さらに基本スタンスとしては、これも当たり前ではあるが、自分が面白いと思うことを伝えるのが必須だろう。かりに書きにくい内容でも、あるいは義務的なものでも、引き受けて書く以上は、そのことを楽しむようにしないとストレスがたまる。それ以上に、書いているときの気持ちは文面に表れてしまう。ま、予算請求書類まで楽しんで書けとまでは言わないが。

もちろん、自分が書きたい内容なら、それにこしたことはない。100周年記念に『天文月報』200巻が出たが、あのパロディ版もメチャメチャ楽しかった。わざわざ計算までして(実話)、著者の名前も我が子に名づけるぐらい悩んで、論文を書く以上の手間暇をかけたが、あんなに楽しく書けた記事は後にも先にもない。掲載後に、ホームページで記事の解題まで書いてしまった。

今回も、メールを受けたとき、あ、そういえば、こういう文章は書いたことないな、と思ったら、書いてみたくなった。

なお、大きい出版社であろうがなかろうが、原稿料が高かろう(内緒)が安かろう(『天文月報』がタダだろう(『天文教育』)が、それで力加減を変えないことも重要だと思う。引き受けた以上はもてるものをすべて出し尽くすほうが、確実に気持ちいい。でも、原稿料(印税)が高ければ気持ちよさが加速するのは否定しない。

#### 4. テクニック

いよいよ(?)、実際に書く際の、テクニックとかスキルみたいなものに移ろう。たいていは書き方の本にも書いてあるとは思っているのだが、ま、読み流してもらえばいい。

まず、論文と同様、最初は(いまでも)、他の人の文章を、上手に“盗む(真似る)”ことだ。もちろん、丸写しではない。咀嚼して消化した後、自分の言葉で吐き戻して(笑)、使う。実際問題として、意味のある言葉は有限個しかないし、書かれる内容も有限だろうから、どう頑張ったってどこ

かで似てしまうこともある。だから、いわゆる“創作料理”というやつと同じく、素材そのものではなく、素材の組み合わせや調理方法にオリジナリティを入れればいい、という意味である。

それから、“推敲”を厭わない、という点も大事だと思う。これは最初から完成度の高いモノを書こうとしないという意味だ。全体の構成は最初にきちっと作って見通しを立てたほうがいい(ただし、柔軟に変更する)。しかし、文章内容自体は、内容も分量も、とりあえず、5、60点レベルのものでいいので、全体を書いてみるわけだ。とにかく全体の骨格さえできてしまえば、肉付けするのは案外と難しくないものである。そして、60点ぐらいのものを推敲して80点ぐらいにし、さらに何度何度も推敲して、よくしていけばいい。ただし、完成して100点になる類のものではないので、どこかで“見切り”をつけるのも肝要だ。

ぼく自身も、いまでも第一稿の完成度はかなり低い。その代わりに、現在連載中の『天文月報』の解説などだと、パワポや修論など素材が十分にそろっていたためもあるが、ざらっとした第一稿は3日(数時間ずつ)ぐらいしかかかっていないだろう。そして、その後で、新幹線の中やホテルとかで、大幅な書き足しや修正を行っている。トータルでは結構時間がかかるが、肉付け作業は細切れでもできるので、どこでもできる。この小文にしても、和田さんのメールを受けた当日に、たまたま空き時間があったので、最初はワープロではなく簡易エディタで、アウトラインを5割ぐらい書いたものだ。それを研究会の合間(笑)とかで肉付けしているのである。実は推敲すればするほど、長くなって、最初は2頁ぐらいのつもりでアウトラインを書いたのに、6頁になってしまった。

なお、途中で何回もプリントアウトする手間暇も是非かけるほうがいい。モニターではわからない全体を俯瞰できるし、電車の中で書き込みもできる。この小文も5回プリントアウトしている。

また赤い彗星のシャアのごとく、つねに二手先  
三手先を読んで行動しておくのも“手”だ。

たとえば、上で書いたように、学会のパワポでも  
駄文でも、何でもいから、自分の財産（および  
財産目録）を増やしておき、どこかで再利用す  
ることが、その手の一つである。

もう少し高いスキルとしては、最初から本を想  
定して、連載などを行うのも一つである。本を1  
冊丸ごと書き下ろすのはたいへんだが、10回ぐら  
い連載したものをもとに膨らませて本にするの  
は、トータルの仕事量は増えても、1回ごとのバ  
リヤーは低い。そのまま本にならなくても、その  
手の文章は、別にバラで使っても、どこかで何某  
かの材料ぐらいにはなるものだ。そして自分の文  
章（財産）だから、迷わずコピペでいい。講義ノ  
ートや講義プリントをきちんと作っておくのも、う  
まくいけば、本の下書きになることがある。

反則技ギリギリなので、強く勧めないが、自分  
の文章を何度も再利用することもある。

もちろん、同じ内容で同じ文章を別の雑誌に投  
稿するのは、これは論外だが、文章表現はだいた  
い同じだが内容は少し異なるものを投稿すること  
はある。最近だと、ジオ・カーニバルというイベ  
ントで行ったネタで、「宇宙図鑑」というものと  
「太陽系図鑑」というものを、『天文月報』と天文  
教育普及研究会の会誌『天文教育』へ投稿したモ  
ノがそれにあたる。これらはともに学生が開発し  
た非常に有用な天文教育教材で、広く業界へ紹介  
したかった。もし『天文月報』の読者と『天文教  
育』の読者がほとんど重なっているなら、まとめ  
て一つの記事にすれば簡単だったのだが、残念な  
ことに重なりはあまり大きくない。そのため、実  
施した年と内容は違うこともあり、類似の内容で  
はあるが、分けて両誌へ投稿する判断をした。結  
果的には、少し水増ししたような感じになってし  
まうのだが、ぼく自身は、その意図や目的が大事  
だと、最近では割り切っている。ただし、若いとき

に業績を水増しする“意図”で、そんな手を使う  
と、信用を失うかもしれない両刃の方法である。

少し似ているが質的に異なる“再”利用として  
は、新人作家が、ある作品を同人誌に書き、その  
作品で商業誌へデビューし、最後に単行本になる  
プロセスと同じ方法を取ることもある。たとえ  
ば、全く趣味で書いたSFがらみの原稿を、最初、  
『ハードSF研究所公報』というSFクラブ誌へ掲  
載し、次に手直しして『天文月報』へ投稿し、最  
後に書籍になったケースなどだ。

あるいは、ブラックホール周辺の時空を表現す  
るとき、自由落下時空を川の流れに、事象の地平  
面を滝に、そして特異点を滝壺にたとえる表現  
は、大昔（笑）に2番目の本『降着円盤への招待』  
で初めて使ったのだが、それ以来、おそらく何十  
回も使っているだろう。これは、それ以上にいい  
表現を思いつかないためである。ほかに調理のし  
ようがないものは、組み合わせを変えるなり、出  
す順番を変えるなりで対処するしか方法がない。

ちなみに、最初の本を書いたときに編集の人が  
教えてくれたことだが、読者がすでに知っている  
ような内容を8割ぐらい書いて、知らないことは  
2割ぐらいに押さえたほうがいいそうだ。これは  
決して読者をバカにしているわけではなく、読者  
が知らないことをあまりに詰め込みすぎると消化  
不良になってしまうので、結局は読んでもらえな  
いという意味である。聞いたときはあまりピンと  
こなかったが、たしかに『降着円盤への招待』を  
書いたときは、若さにまかせて思いっきり詰め込  
んだので、あまり売れなかった（笑）。それ以来、  
ブルーバックスからは話が来なくなった（泣）。  
ま、そういう苦い経験もあるので、最近ではか  
なり冗長性や反復性のある書き方になっている。

それから、これは書くことだけではなくスケ  
ジュリングの基本だが、今できることは今する、  
今日できることは今日する、明日すればいいこと  
も可能なら今日しておく。当然、締め切りがある



ものは、締め切りまでにするのではなく、可能な限り前倒して済ませておく。

世間的には、面倒なことやイヤなことは後回しにする人が多いようだが、ぼくは、そういうことが残っていると、イライラして気持ちよく楽しめないために、できるだけ早めに片づけたい。本人がたいへんに真面目で几帳面だという（自分で言うか？）、多分に性格的なこともあるが、どうせしなければならぬことなら、さっさと済ませて、後で心おきなく遊んだほうがいだろう。

ただ、この方針はいまでは有名無実になっている。たとえば、昔は美味しいものは最後に食べる主義だったが、“これもらってイイ？”（訊いているときはすでに口の中）と言われて大好物を何度も食われた。だからいまでは好きなものから順に食べるし、遊びたいときに（遊べるときに）遊ぶ。じゃあ、いったい、何が言いたいんや、という感じがするかもしれないが、食い物の恨みは恐ろしい、いやいや、人間は経験から学び成長するのだ。

それに、この前倒しの考え方も、少し両刃の剣的なリスクがある。というのは、早めに仕事を片づけてしまうと、一般に、もっと仕事が降ってくるためだ。それで、一時は、締め切り前に早めに済ませても、できてないフリをして、締め切りまで手元で寝かせておいた時期もあった。けど、いまは、そんなことしてたら何してたか忘れてしまうし、どっちみち仕事は山ほど降ってくるので、タイムラグは置いていない。

しかし、前倒し主義には一つ高いメリットがある。というのは、一般に（とくに研究者は）、締め切りをきちんと守る人は少ない。ぼく自身の経験と、やはり長く編集をしている人の経験が一致していることだが、“10分の1則”というものがある。すなわち、締め切りをちゃんと守るのは10人に一人ぐらいで、残りは締め切りに遅れる。さらに10人に一人は引き受けた原稿を落とす（書かない）。だから、締め切り以内はもちろん、かなり早めに原稿を出すと、編集者からは信頼を受け

る。そしてやはり仕事が降ってくる。

スケジューリング的なことでは、時間を作る、あるいは有効に使う努力は、日々、これ、怠らないことだろう。まず、時間を作るために寝ない。まあ、これは少しウソだが、研究のアイデアにせよ文章にせよ、夜中にでも思いついた内容はすぐにメモる。これは実行している人は少なくないはずだ。また歩きながらも風呂でも、文案や補足を考えて、駅のホームなどで座ったら、すぐにプリントアウトに書き込む。これはホントだ。

それから、書くだけではないが、さまざまな作業を“パラレル”に行うことで、時間を効率的に利用するのもかなり有効である。これも実行している人は多いはずだ。このパラレル作業には二つの種類がある。

まず、一つは、内容の違う作業を複数走らせて、ある一定時間して能率が落ちたら、あるいは煮詰まったら、違う作業に切り替える。このときにパラレルで走らせる作業は、できるだけ違うタイプのものがいい。たとえば、先週の出張中は、本の文章を書くこと、連載の文章を書くこと、夏の学校のパワポを作ること、などを交代交代で行っていた。

もう一つの意味は、同じモノは同じ時期に処理してしまうことだ。これも実行している人は何人も知っている。たとえば、ぼくのような理論計算の場合、計算の目処が立ったら、学会発表の準備も論文執筆も、できるだけ同時期に済ませてしまうのだ。オンタイムだと内容が鮮明で、細かいことまでまだ覚えているので、非常に効率よく片づく。あまり時間をおかずに記事も書く。

それから、何事にも優先順位というものがある。“やることリスト”をモニターに貼っている人は多いはずだ。このとき、優先順位は、臨機応変に変更する必要もある。たとえば、その日に使える時間や、あるいは会議までの残り時間に合わせて、作業順序を入れ替え、中途半端な時間が余ら

ないようにすると、時間が効率よく使える。ちなみに、宇宙論のワークショップ中には、最初は宇宙論の文章を書く予定だったが、この小文を割り込ませた。そのときの気分（ノリ）の問題も重要なのだ。

また実用上のスキルとしては、“タッチタイプ”をきちんと覚えておくことを勧めたい。実は、ぼく自身は論文や文章を書くためにタッチタイプを覚えたわけではない。高校のときにタイプライターをもっている同級生がいて、すごく羨ましくって、大学に入ってから一念発起してタイプライターを買い、タッチタイプ（当時はブラインドタッチと呼んでいた）を特訓したのだ。ま、当時は趣味みたいなものである。ま、それはともあれ、変な癖のつかないうちに、正しいタッチタイピングを覚えれば（1週間特訓すればだいたい習得できる）、そうでない場合の10倍速でタイピングができる。考える速度と同じぐらいの速度で入力できるのは、これは、きわめて強力なスキルになる。この雑文の中では、この段落が一番有用だったかもしれない（爆）。

## 5. サンクストゥオール

最後に、これも執筆に限ったことではないが、お褒めの言葉は、あらゆることのエネルギー源であり推進剤でもある。今回も和田さんの勧めがなければ、こういう文章は書かなかっただろう。ちなみに、“お褒め”以外には“怒り”も原動力になるが、そっちは符号がマイナスなので、真面目に怒るとかなりしんどくて疲れる。だから怒るときには斜に構えてシニカルに怒れば、経験上はあまり疲れずに上手にエネルギーを使える。

いまでも思い出すのは、宇宙に関する最初の本『降着円盤への招待』を出してしばらくのころ、箱根で行われた「てんま研究会」で一人の院生が、『降着円盤への招待』を読んで業界に来たと言ってくれたことである。男の子だったので、もちろ

ん名前は聞いていないが、しかし、こういうのは何より得難い、お褒めの言葉である。苦勞して書いた売れない本の疲れが、その一言で、ぜんぶ吹き飛んでしまう。

ぼく自身も、海部宣男『銀河から宇宙へ』、石原藤夫『SF 相対論入門』、佐藤文隆・松田卓也『相対論的宇宙論』の3冊から、高校のころに非常に大きな影響を受けた。いまだに手元に残しているので、いま確認してみたら、高校3年から大学2年にかけて読んだようである。もちろん、業界に入ってすぐにサインをもらった（！）。

ま、ぼく自身は横着者で人を褒めるのは面倒だし、褒められるのも気恥ずかしいが、他人の文章を褒めることは、自分が文章を書く原動力にはならないかもしれないが、その人が文章を書くエネルギー源になるだろう。

最後の最後に、重要なこととして、共著者や知り合いに恵まれるというのも、きわめて大きなポイントだと思う。本にせよ記事にせよ、一人で書くほうが自分のペースでできるので楽は楽だが、どうしても内容が偏ったりマンネリ化してしまう。だから場合によっては、何人かの人と一緒に仕事したほうが、幅が広がっていいものになる。実際、ぼく自身も共著のものや編著のものも案外と多いのである。いや、単著の場合だって、いろいろな人の研究成果や知恵を使わせてもらうことは少なくない。だから、常日頃から、たくさん知り合い（味方）を作っておくことも心がけたほうがいい。ただ、歯に衣着せぬ言い方でズケズケ言うと、別の知り合い（敵）を作ってしまうだろう。辛辣な言い方もこんな文章を書くのも、人生五十年終わって自分をあらかた捨ててからのほうがいいかもしれない。～面白き こともなき世を面白く 棲みなすものは 心なりけり～ 晋作

本稿の執筆を勧めて（？）くださった和田桂一編集長に感謝します。またアバターを描いてくれた秋月千鶴さんにも感謝します。